

週刊メッセージ “ユナタン” 7

～ ハロウィンと衣装制作と先生の役割 ～

平成27年11月11日 片山喜章

10月29日、A園で保育環境評価スケールと公開保育が開催されました。午後、11名の観察者とクラス担任が参加して検討会をしました。その時「素晴らしい保育活動」と「素敵な先生像」のイメージが、法人評価者と外部評価者との間で微妙に異なりました。この違いを掘り下げて考えると、私たちがめざす「表現活動」や「保育者のかかわり方」が浮き彫りになりました。

法人7園では、関東、関西エリアでわかれて、それぞれアメリカ版の「保育環境評価スケール」を用いて「室内環境や衛生安全面の状態」「保育者の振る舞い方」等について輪番に相互に評価し合っています。同時に公開保育も行います。今年度は、全園、造形活動に絞って保育し、その日に至るまでの経緯と経過、事前準備、そして当日の活動とかかわり方をまとめて評価します。

各園、春秋、乳児幼児、年間計4回、評価を受けます。一方で評価者として各園2名×関東は8回、関西は2名×12回、他園に評価者として出向いて検討会に加わります。その際、大学関係者や法人外の園長がたびたび参加します。この事業は、他者から評価や指摘を受けつつ、他者を評価しますから、物怖じしない力が身に付きます。また、我流ではなくてスケールに則った評価をし合うので、おのずと法人全体の保育（保育者）の質は底上げされると期待しています。

その朝、「プレイルーム」といわれる「コーナー・ゾーン」で思いおもいに遊んでいました。その環境や子どもの様子も評価の対象です。その後、サークルタイムにおいて「ハロウィン」と「制作」について先生の話がありました。この時、ハロウィンの衣装制作はかなりすすんでいる状況でした。経過としては、1か月ほど前から秋をテーマに木の実や小枝を拾って、グループで話し合いながら、それぞれに「秋」を作品化し、展示もされていました（子どもの作品展示は、スケールで評価される項目です）。秋というテーマを探っていると「ハロウィン」という言葉が子どもから飛び出して、担任はそれをキャッチしてハロウィンで仮装しようということになり、そのための衣装の制作について話し合いがなされ、6グループで制作活動に入りました。

はじめにグループありきではなくて仮装したいもの＝「ドラキュラ」「フランケンシュタイン」「貞子」「魔女」などを、どんどん出して、“なりたいもの別”にグループ分けをすると、結果的に6グループになり、この日は、それぞれグループで、作りはじめて2回目の活動日でした。

素材は、いろいろな紙と廃材、セロテープ、水性ペン等、様々に前方のテーブルに揃えられていました。子どもたちは、会話を楽しみながら、それぞれ制作活動に興じており、生き生きした雰囲気です。作り上げた子は、衣装を身にまとして、次々に私たちにも見せにやってきます。

午後の振り返り。小学校の校長を退職し4月から保育園の園長の職についた2人の評価者からは、サークルタイムの内容と秋からはじまった一連の制作活動の流れに対して（経過は資料で配布）絶賛の声をいただきました。けれども、私（たち）は少し違う見方をしていました。

「サークルタイム」は保育者より子どもが長く多く話すことが基本です。当日「ハロウィン」の意味について、担任が調べてきた事を子どもに語る場面がありました。しかし前日に「ハロウィンって何？ お家の人にきいて教えてね」と問いかけておくと家庭でハロウィンの話が弾み、当日も子ども主導で話が盛り上がったと思われます。先生＝教える人という世間一般の観念から抜け出して、それぞれが話を持ち寄って「対話の時間」にしていく事が教育であると考えます。

そして、制作活動中の“先生の役割”も話題になりました。当日、先生は、素材が並んだテーブルの番人でした。「ドラキュラ」や「魔女」をイメージしながら制作しているのですから創意を刺激する問いかけをするために巡回するのが役割だと思います。「こんなふうにしたら」と押し付けるのではなく、その子に変身した“怪物の物語”をその子から引き出す問いかけです。

活動中、無地のアイマスクをかぶって得意気に脅しにやってきた男児に私は「なんか、怖くないな～、鏡を見ておいで」と水を差すような発言をして離れました。その子は“姿見”で自分の変装姿をまじまじと眺め、その後、アイマスクに水性ペンで何やら模様を描き出して自分なりに「怖い」を表現し「ドラキュラ物語」を携えて、また私のところにやって来たのでした。

「制作」において何よりも素材が多種多様であることが重要です。その子がたくさんの素材と対話する事で、例えば「ドラキュラ」のイメージが深まります。そこに先生が“創意を刺激する問いかけ”をすると、“物語”が生まれると考えられます。自慢げに衣装を見せに来た女兒に私が問いかけをすると去ってしまいました。が、ほどなく問いかけた事に刺激を受けて衣装に手を加えてお話してくれました。押しつけと紙一重の創意をくすぐる問いかけだった気がします。

子どもはより多くの素材と対話することで、そして先生や友達の“問いかけ”によって想像力や表現力を深めるので、大人の想像力が、子どもの表現力を豊かにする鍵になると言えそうです。

A園の保護者の方はすぐに自園だとわかります。今回「事例」として取り上げた事を快く思わないかもしれませんが、外部の参加者から絶賛されたように良い実践でした。しかし私たちは、欲張って“もっと豊かに想像し創造する子どもに育ててほしい”と願っていますから、保育者集団にも自分自身のイメージを不断に鍛えることを期待します。（ご理解ください）

A園に、今回の公開保育を“**ユナタン**”に掲載することを持ちかけた時、二つ返事で快諾した担任、主任、園長の“開かれた心持ち”に創意を発揮できる園風土があると感じています。